

リゾート地として知られる南国フィジーで英語の語学学校を徒手空拳で設立。直営の学校を拠点にきめ細かな留学生生活を提供する。欧米への語学留学の約3分の1という格安料金で、OLや学生、親子連れなどを幅広く集客する。  
文/北方雅人 写真/菅野勝男(67ページ)

**語** 留学先として、南太平洋に浮かぶフィジー諸島共和国の人気が急上昇している。仕掛け人は、South Pacific Free Bird (サウスパシフィック・フリーバード)の社長、

谷口浩(36歳)。日本人にとって、フィジーは海が美しい南国のリゾートというイメージが強い。その地で、谷口は2004年、同国初の英語学校を開いた。

受け入れ留学生は1年目こそ54人だったが、2年目以降は250人(05年度)、1050人(06年度)、2218人(07年度)と倍々で増加。今年度も前年比2倍の5000人を見込む。OLや学生のほか、リゾート気分を訪れる親子連れも多い。谷口の功績で、フィジーは米国や英国などと並ぶ英語留学の人気スポットになった。

ターゲットは日本人だけではない。谷口は当初から、フィジー留学を世界に広めることを考えていた。04年に韓国、06年には中国に早々と営業拠点(フランチャイズチェーン)を開設し

た。アジアのほか、中東からも留学生を広く集めており、日本人以外が約2割を占める。

**直営の語学学校で  
仲介手数料を省く**

急成長の要因は、留学費用の安さだ。渡航費を除く費用(宿泊費や食費も含む)は1カ月で11万~13万円、1年間で100万円前後と、欧米への留学費用の約3分の1。これなら金銭面で留学をあきらめていた若年層にも手が届く。

安くできるのは、物価の安さに加え、自社で語学学校を運営しているからだ。国内の旅行会社や留学エージェント(代理店)が現地の語学学校を手配する方式が一般的だが、自社直営の語学学校なら仲介手数料が省ける。しかも、2つの校舎は空き校舎を安く利用したものだ。

「フィジーは教育水準が高くて子供の教育費を惜しまない傾向があるが、近年教育費が高騰したために少子化が進んだ。子供が減った結果、空き校舎が増え

**南国フィジーに**

**初の語学学校を設立**

**「格安留学」を掲げ**

**OLや親子連れを集客**

サウスパシフィック・フリーバード社長  
(フィジーでの語学留学事業)

**谷口浩**

HIROSHI TANIGUCHI

受け入れ留学生は毎年倍々に増え、5年目にして年間5000人を見込む



**PROFILE**

1972年福井県生まれ。中国・上海の同済大学中退。香港のマンション分譲会社、タイの建設会社に勤務した後、帰国。父が経営する建設会社に入るが、父と衝突を繰り返して退社。2000年、金沢市で中国人労働者の日本語教育などを手掛ける北陸対外事業協同組合を設立し、理事長に就任。2004年に辞任し、South Pacific Free Birdを設立。フィジー諸島共和国で英語学校を開き、格安の語学留学事業を始める

# どんなに頑張っても 父の力にされてしまう。 自分の力を証明してやる

中でも外でも、父の存在が重くのしかかっていたからだ。「どんなに頑張っても、周囲には『あの社長さんの子供だからそれくらいできて当然』と見られる。父を超えたい、自分の力を証明したいという欲求がとても強かった。教師にも反発した。小学生のとき担任の教師を論破し、『私が間違っていましたと僕に謝罪しなさい』と詰め寄ったこともある」

## 経営者の父に猛反発し 中国の大学に進学

大学進学に際し、奨学金を受けて独り立ちしようとしたが、裕福な家庭の谷口は資格要件から外れてしまう。海外はどうかと調べると、中国の奨学金なら受けられる。それから中国語を猛勉強し、上海の同済大学応用物理学部に進学。谷口はこの中

国で、フィジー留学のアイデアにつながる経験をした。「日本人のOLや大学生が大勢留学していたが、話を聞いてみると、欧米への留学費用は高いから中国で妥協したのだと言う。留学費用の高さと、行き先を妥協してでも留学したい人の多さに驚いた」

応用物理学部から建築学部に移るなど目標が定まらずにいた谷口は、大学を中退。香港とタイで会社勤めをした後に帰国し、父の会社に入る。

だが、すぐに父と衝突する。もはやこれまでと、財産放棄の書類に判を押し、親子の縁を切った。以来、谷口は家族と一切連絡を取っていない。

身の回りの物をバイクに載せて家を出た谷口は、ガソリンが切れた場所だった金沢市に落ち着く。中国語の語学力を生か

し、中国人労働者の日本語教育などを手掛ける仕事を始めた。

事業はすぐに軌道に乗ったが、2002年に転機を迎える。谷口は海外で自動車の運転免許を取得するためにフィジーを訪れた。陽気なフィジー人にすっかりほれ込み、ホテルには戻らず、町で知り合った人の家を泊まり歩いた。フィジーの公用語は英語。谷口は、人がフレンドリーで物価が安いフィジーで語学学校をつくれれば面白いだろうと思いつき、それまでの事業から離れることを決めた。

そして谷口は、フィジーの内務省などに語学学校の設立を提案。フィジー政府は教師の雇用拡大や経済効果が期待できると判断して、全面的に支援してくれることになった。

強烈な上昇志向で自らの人生を切り開いてきた谷口には、と



フィジー人教師は45人。正社員として雇っている

## 社会問題になっていた

少子化に伴い、職を失った教師も多かった。谷口は、現在45人のフィジー人教師をすべて正社員として雇っている。それでも欧米などに比べれば賃金水準が低いので、人件費の負担は軽

いという。

谷口は1972年、福井県小浜市に3人兄弟の長男として生まれた。父は地元でよく知られた建設会社の社長。谷口は物心ついたときから父を強く意識し、そして反発して育った。家

もすれば同世代の若者が頼りなく見えてしまう。それは、留学を申し込んでくる顧客に対して感じる人が多いという。

留學生の4割は25〜35歳の女性。会社を辞める覚悟で留学を申し込んだのに、出発直前になって踏み切りがつかず、「やはりやめようかと思う」と電話をかけてくる人も少なくない。そんなときはスタッフが親身になって話を聞き、勇気づける。

## 「リセット留学」のOLが 涙を流す「感動の留學生生活」

「彼女たちの多くは、ただ語学を学ぶのが目的ではなくて、『人生をリセットしたい』と思っている。彼女たちの背中を押すからには、必ずフィジーでその人の性格や人生観を変えてみ

せる」

そこで、留學生が多くなるフィジー人と接する機会を半ば強制的につくっている。例えば、語学学校の校舎は小学校の敷地内に建てられているので、休み時間や放課後は現地の子供たちと自然に交流する。フィジーの幼稚園で園児の世話をする短期間のボランティアプログラムも用意している。

宿泊先は原則的にホームステイ。同社の日本人スタッフがホームステイ先の家族の人柄や受け入れ態勢を念頭にチェックして選別している。あまり積極的でない留學生も早くなじめるといふ。フィジー人は兄弟や親せきの結束が強く、互いの家をよく行き来するので、留學生の交流範囲も広がりやすい。



語学学校の建物は、空き校舎を安く再利用している



留學生は、陽気なフィジー人家庭にホームステイする



学校はフィジー政府がバックアップ。谷口社長は政府高官とも親しい

学校の授業も本人の性格を変え、ことに重きを置く。同社が掲げるフレーズは「Break your shell」（殻を砕く）。「恥ずかしがりやをぶち壊せ」。そのため、校舎内で英語以外の使用は厳禁。ルールを破った生徒にはフィジー人教師が厳しく注意する。教師が自社の社員だから、こうした指導を徹底しやすい。

「フィジー人の陽気な人柄に接して、みるみる積極的になっていく。人間関係が希薄になりがちな日本と違って深い付き合いができるので、毎週実施している卒業式で多くの留學生が涙を流す」

自分の力を証明したいと願っ

てきた谷口にとっても、人への影響力を実感できるフィジー留学のビジネスは喜びが大きい。谷口はフィジーで次の事業計画をいくつも描いている。その一つは、全寮制の高校を作り、アトピー性皮膚炎に悩む日本の高校生を受け入れるという。フィジーの高校生と机を並べて学びながら、環境汚染の少ない国で症状の改善を図ってもらうのだという。

ビジネスの拡大だけではなく、谷口はフィジーの財務大臣に立候補するという計画も温めている。既存の経営者の枠に収まる気はさらさらしない。

(文中敬称略)

### South Pacific Free Bird

- 住所 東京都新宿区市谷田町2-6-4
- 売上高 約5億円(2008年2月期)
- 資本金 6000万円
- 従業員数 102人

